

奨励研究 研究報告書

研究課題

台湾における茶道教育研究・現状の分析と将来への指針・

国立高雄餐旅大学 応用日本語学科 助理教授

前川 正名

(選考時所属 台湾首府大学 応用外国語学科 助理教授)

一、はじめに

台湾では、歴史的な経緯もあり、日本語教育との関係が深い。また、台湾だけでなく、世界的にも日本語教育熱は増大していると言つてよいだろう。そして、その教育は、単に「話すことができる」「読むことができる」という、実務中心の時代から、半歩踏み出し始めているとも言える。

単なるコミュニケーションツールとしての日本語能力の習熟だけではなく、幅広い視野をもった日本語系人材育成へと移行しつつあり、具体的には、日本の文学・歴史・地理・社会背景といった知識を獲得することが求められている。これら必須の周辺知識の一つに日本文化も含まれている。もちろん、それら教養ともいえる周辺知識への理解は、より上手く話し、より正確に、より速く読み書きをする、その目的到達への手段の一つという側面もあるのだが、学習者個々人の関心もあり、カリキュラムに積極的に取り入れられている。

なかでも、茶道に対する関心はきわめて高いといえる。台湾の各大学における日本語学科のホームページを見ただけでも、茶道、華道、浴衣の着方等の活動報告が必ずといってよい程、写真付きで載せられている。関心の高さを示す証左と言えよう。

しかしながら、それらの講義は、さまざまな問題を含んでいる。カリキュラム、学校に用意されている道具、講師の資格、講師への謝金を含んだ予算額の問題等、そして、これらの問題への開催機関やスタッフの無理解等である。

申請者は、台湾の大学の日本語学科において、日本文化系講義の手配をまかされており、このような問題に直面している一人である。このような好ましくない現実を助長している原因の一つに、外国における茶道教育というもののあり方について、十分な議論がされていないことが挙げられると考えられる。

このような認識から、勤務先の大学を含め、台湾の各学校における調査を行ない、茶道教育の現状を整理し、それらの問題点に対し検討を加えた。

二、台湾における日本語教育

まず、調査の背景となる台湾における日本語教育の状況について、大学を中心に簡単に述べておきたい。

台湾における日本語教育の歴史は古く、戦前・戦中のいわゆる日本統治時代に遡る。その後、台湾における日本語教育は、一時衰退する。しかし、日本の経済大国としての復興と連動して、世界的に日本語教育熱が増大する。台湾もまた、例外ではなく、戦前・戦中とは異なり「非母語話者に対する（外国語としての）日本語教育」として復活した。

現在、台湾では、日本以上の少子化のため、大学・学科の改編が毎学期のように起きている。そのため、二〇〇九年時の財団法人交流協会の調査をもとに、筆者が追跡した範囲での概数にて記すと、一般系大学約六十強、技職系大学約九十強の合計約百六十の大学が存在する。日本語専門学科を持つ大学を含め、一般教養部の外国語に日本語を設けている大学はほぼ一〇〇パーセントである（財団法人交流協会の調査では、約九四パーセント）。日本語学習者数は、正規の高等教育機関、いわゆる大学のみで、十二万人前後である。台湾の総人口が約二千三百万人、大学生は約百二十万人、一般教養として外国語を学ぶ場合、原則として一・二年生に限定されることを考えれば、外国語の定番科目として定着していることがわかる。なお、中学・高校にて日本語を教えているところも多い（高校では日本語専門学科も存在する）。

しかしながら、日本語専門学科、つまり日本文学科、日本語学科、あるいは外国語学科日本語専攻を設けている大学は、四十校程度（一般系二十、技職系二十）にとどまる。中学・高校・大学における定番の外国語科目でありながらも、専門学科を擁する大学が少ないため、日本語学科は他学科に比べ、入試倍率が高くなりがちである。したがって、学内の（入試時の成績の）上位学科になる傾向がある。

三、文化教育の現状

申請者は、文化教育（特に茶道）の現状を調査すべく、現地視察を中心に調査を行なった。筆者が調査した範囲ではあるが、日本語系学科が存在する大学であれば、専用の施設が設けられていた。その呼び方は茶室、日本館、和室、文化教室、畳スペース等、さまざまである。また、それらの施設に付随して茶器や浴衣、和服等、備品もそろえられており、単純にハード面としては、「外国における文化教育（体験授業）」の一つとして抹茶を作つて飲む」のであれば十分とも思われる。

ただし、海外であることを差し引いて多少の不備を考慮したとしても、実技をとまなう「茶道」講座と呼べるものが開講できるのは、わずか数校に止まるといわざるを得ない。

例えば、釜について述べてみよう。釜が備品として存在した場合でも、

- A、熱源（茶道用の炭・専用電熱器）がない。
- B、釜数き等がなく、畳や床に直接置かれている。
- C、釜と周辺の道具はあるが、専用電熱器の電源の確保が困難である。

等である。

A・Bのケースであれば、講師が不足している道具を持ち込めばよい話とも言える。Bの場合は、やや乱暴な話ではあるが、耐熱性の板等、代用品はいくらでも手に入る。しかし、A・Bいずれの場合も、往々にしてそれが必要だという知識を持った人物がいない。

つまり、次に述べるソフト面の話にも関連するのだが、講座開催側に茶道の講師に対して必要な伝達が出来ないために、何が不足しているのか明瞭ではない状態で講座を開講しなければならぬことも多い。なお、持ち込んだ講師個人の道具が破損した場合、その保証はどうなるのか等、曖昧なままに引き受けざるを得ないことも多く、ストレス発生の大きな原因でもある。

Cに関しては、専用の設備（和室等）があるとは言つても、既存の教室を改装している例が多く、止むを得ないことも多いのだが、使いにくさは否めない。Cと同様の例としては、給水施設（台湾の水道水は飲用できない）との距離が遠く、また、それに対する（タンクやバケツ等の周辺用具の不足を含め）フォローがない、等である。

また、人的資源を中心としたソフト面、ハード面を存続させるノウハウ（特にメンテナンス）に不足を感じた。これらは、謝金、消耗品等、基本的に予算が問題となる部分が起点となっている。そして、そこに、学校側が要求するカリキュラム自体の不備、開催機関や活動の手助けをするスタッフの無理解等が加わり、とくに実際の手配を行なう日本人教員（まれに台湾人）の不満を増大させているようである。

そもそも、海外で日本語教育職に就く日本人は、資格や知識の有無を問わず、こういった仕事を任される傾向にある。しかしながら、開講するにあたって、必要な道具や、それにかかる予算等の情報が存在するかと言え、そうではない。日本の学校における茶道教育の情報が十分に開示されているとは言いがたい状況である。まして、海外での茶道教育の情報が存在するかと言え、ほとんど無いと言わざるを得ない。どんな道具があるのか、それを購入できる場所はどこか、費用がいくらかかるのか、茶道を経験した者でなければ分からない問題を、ただ日本人であると言っただけで、茶道の素養の有無すら関係無しに、いわば強制的に責任者に任じられており、絶望にも近い孤立感を抱えている例もある。

日本にて、海外における日本文化講座の事例を見聞する場合、往々にして大成功している事例や表現ばかりを目にしているのではなからうか。高名な師範が、良い道具の数々を持参し、しかもそれらを、日台友好の名の下に、ほぼ無償で定期的に披露する。台湾の大学側が思い描いている茶道講座とは、そういったものである。そのため、茶菓子を例にとるならば、大学側は主菓子が出ることとを期待する。

無論、侘び寂びの境地からすれば、茶菓子が何であるかを問題とすること自体が野暮である。しかし、現実はそのはいかない。海外では、一般的ではない道具を用いたり、標準的ではない行動を

することは、「偽者」のレッテルを貼られかねない危険性を持つ。それは、偏った知識しか持たないことによる、ある種の教条主義とも言えるだろう。現実的には、日本に比べて道具入手等の困難があるにもかかわらず、日本での標準に出来る限り近づけねばならないという矛盾した行動をとることになる。それでもなお、実際には、干菓子予算すら出ずに、黒砂糖や氷砂糖をお菓子の代用として体験授業を行なっていかなざるをえないこともある。

四、おわりに

前章では、いくつかの実情を記した。それらは、茶道界としては美しい話ではなかったと思われる。実際の現場は、極度の混乱をともなっている状況であり、講師や担当教員の多大なる努力と辛抱の賜物によって成り立っているのである。とはいえ、それらは、日本の基準から見ても、噴飯ものの内容であることも多いだろう。台湾にて実際に日本文化講座を担当している筆者も、その批判に対しては反論をしない。

しかしながら、現状を嘆いているだけでは永久に改善しない。本研究にて、そのような情報を集約・集積し、公開していくことにより、台湾だけではなく、世界で同様に苦勞している日本文化講義を担当あるいは手配している教員の手助けになると考えた。さらには現地スタッフの知識の底上げをすることによって、講師の不満や違和感を軽減することにも繋がれるものと考ええる。

筆者自身、成功の部類に属する事例も経験しているが、あえて通常目にするのではないと思われる情報こそ必要であると考え、それらを優先的に発信することとした。また、公開することにより、批判も多々頂戴するであろうが、それ以上に、有用な助言も生まれ出ることを願っている。

附記

本研究の成果の一部は、「日本語学科における日本文化系講義のあり方」と題する発表を台湾にて、また、「海外における日本文化系講義について―台湾での茶道体験授業を例として―」（仮）を日本にて投稿の予定である。

なお、調査先の各大学および諸先生方の協力に対し、感謝を意を示したい。

参考文献

〈日本語文献〉

- 池田博子、「市販抹茶の価格と品質および起泡性との関係について」、『日本調理科学会誌』三五巻三号、二〇〇二年八月。
- 大西市造他、「てん茶の粉碎方法と抹茶の物性」、『茶業研究報告』三九、一九七三年六月。
- 川守田礼子、「日本の文化」における茶道実習を中心とした感性育成教育の取り組み、「八戸工業大学紀要』二八号、二〇〇九年二月。
- 小山洋二、「抹茶について」、『茶』五九巻六月号、静岡県茶業会議所、二〇〇六年六月。
- 財団法人交流協会台北事務所、『二〇〇九年度台湾における日本語教育事情調査報告書』、財団法人交流協会、二〇〇九年八月。
- 櫻庭昌子他、「茶道を軸とした多面的な教育の試み」、『筑波技術短期大学テクノレポート』七号、二〇〇〇年三月。
- 周金龍、「日本語教育における日本文化の実践―茶道によつての試み」、『育達人文社會學報』第二期、二〇〇五年七月。
- 高岡秀一郎、「茶道や能をクラブ活動に採り入れ―石川県加賀市教育委員会」、『内外教育』五一九四号、二〇〇〇一年四月。
- 立田ルミ、「ネットワークを用いたコースの開発例と問題点―イリノイ大学で茶道のコースを開発して」、『CIEC会誌創刊準備号』、CIEC会誌創刊準備号編集委員会、一九九六年三月。
- 前川正名、「日本語学科における文化教育―茶道を例として」、『明道日本語教育』第四期、二〇一〇年九月。

前川正名、日本語学科における茶道体験授業―何をどこまで用意するべきか』、『二〇一〇外語教學
與産業行銷教師專業成長研討會論文集』、明道大学、文鶴出版、二〇一二年二月。

〈中国語文献〉

- 千宗守主講・潘・整理翻譯〈茶道與其精神〉、《美學藝術學》一、二〇〇二年六月。
王銘顯・孫銘賢〈跨文化演變後臺灣元素之日本茶道〉、《藝術欣賞》三の四、二〇〇七年八月。
成者仁、〈日本茶道源流概説〉、《歴史文物》一〇九、二〇〇二年八月。
林麗純〈歴史心・茶道情―日本茶道在台北〉、《博覽家雜誌》一三六、二〇〇三年六月。
茂呂美耶〈茶道の起源〉、《貿易雜誌》一二八、二〇〇三年七月。
蕭麗華、〈日中茶禪的美學淵源〉、《法鼓人文學報》第三期、二〇〇六年十二月。
潘・、〈東方的解脱藝術―日本茶道〉、《傳統藝術》三〇、二〇〇三年五月。
鄭又嘉〈日本茶道・觀想獻藝〉、《典藏古美術》一二三、二〇〇二年十二月。